法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-08

学問への姿勢 : 屋嘉比収著『〈近代沖縄〉の知識人 : 島袋全発の軌跡』から学ぶ

藤澤, 健一

(出版者 / Publisher)
法政大学沖縄文化研究所
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
沖縄文化研究 / 沖縄文化研究
(巻 / Volume)
38
(開始ページ / Start Page)
317
(終了ページ / End Page)
335
(発行年 / Year)
2012-03-31
(URL)
https://doi.org/10.15002/00007988

Hosei University Repository

学問への姿勢

——屋嘉比収著『〈近代沖縄〉の知識人——島袋全発の軌跡』から学ぶ

藤澤健一

はじめに

本書は吉川弘文館の歴史文化ライブラリーの一巻として二〇一〇年三月に刊行された。著者・屋嘉比収（以下、原則として著者と表記）は二〇〇九年一〇月に世織書房から『沖縄戦、米軍占領史を学びなおす——記憶をいかに継承するか』を刊行しており、あいついで刊行された二点が遺著となった。

以下では、書評という形態をとりながら、本書についての具体的な検討をすすめる。しかし、本稿には著者への追悼という意味合いが同時に込められている。

もはやわたしたちには著者からの応答をのぞむ術はない。いまとなっては書評と追悼を区分けすることはすくなくとも評者にはできない。とはいえ一般に追悼は（その固有の意味と作法があるが）、

Hosei University Repository

学術的な成果と達成、同時にその限界を見定めるための批評を本旨とした書評とは相容れない。こうした逡巡をためらわず記しておきたい。そのうえで本稿のめざすところは、なにより研究者としての著者の遺志にひとりの研究者として応じることである。

本書についての批評を通じて、著者の学問への姿勢から評者が学んできたことをささやかながらも記すことで、著者の面影を偲ぶよすがとしたい。

一　位置

本書は、島袋全発（以下、本書にならい全発として略記）というひとりの「知識人」の人生に寄り添いつつ、近現代沖縄史という歴史空間をふかく考察しようとする。

本書がコンパクトにまとめられているという性格上、先行諸研究の吟味はごく抑制的に記述されるにとどめられる。研究史における位置としていえば、先行世代によって彫琢されてきた沖縄思想史研究の水脈をたしかに受け継ぎつつ、さらにその先を見出そうという意図を本書はもっている。この意図がどこまで具体的に実現できたのかが、本書が評価される際の研究史上の水準点であろう。具体的に示せば、比屋根照夫「濤韻島袋全発論覚書：〝新人〟世代の〝悲哀〟――伊波・月城・全発をめぐって」（『新沖縄文学』第三三号、沖縄タイムス社、一九七六年一〇月、のちに同『近代沖縄の精神史』

Hosei University Repository

社会評論社、一九九六年に収載）などを筆頭に挙げることができる。さらに本書においてもたびたび引照される全発の年譜類にくわえ、安良城盛昭、鹿野政直らの著作、また、全発の著作が復刻されるに際して付された解題（たとえば、外間守善「解説」、島袋全発『沖縄童謡集』平凡社〈東洋文庫〉、一九七二年、所収）といった諸研究との対比によって本書の位置はおのずと照らし出される（ただし、本書の性格を考慮して、これら先行世代による蓄積に照らした本書の位置について本稿ではほとんど論じない）。

内容へと立ち入るための前提として、本書の記述に拠りつつ、全発の経歴をまとめておく。一八八八年に那覇で出生した全発は沖縄県立中学校を卒業、一九〇七年に第七高等学校造士館に入学したのち、京都帝国大学法科大学に入学、一九一四年に卒業した。一九一五年に帰郷し、『沖縄毎日新聞』記者、那覇区役所書記などをへて、一九二三年に那覇市立実科高等女学校長に就任した。一九三五年に沖縄県立図書館長に就任するが、一九四〇年に退職。私立開南中学校教諭をへて、一九四二年に那覇市会議員に当選した。沖縄戦後は、沖縄民政府官房長に就任。商工部長をへて一九五〇年に退職した。一九五一年、『琉球新報』の編集局長兼主筆となる。一九五三年に六五歳で死去した。

主な著作に『那覇変遷記』（沖縄書籍、一九三〇年）、『沖縄童謡集』（一誠社、一九三四年）などがあり、没後に島袋全発遺稿刊行会編『島袋全発著作集』（おきなわ社、一九五六年）が刊行されている。

Hosei University Repository

二　構成

本書の構成を章節レベルに限定して示す（あとがきなどは省略した）。

沖縄学の群像――プロローグ

知識人・全発の誕生――文明開化から植民地時代へ

幼少時代から第七高造士館時代まで

国家観と民族観の相克――太田朝敷、伊波普猷との認識の相違

京都帝国大学法科学生時代

教育と南島研究の時代

帰郷後の全発の活動

昭和戦前期の郷土研究への沈潜

戦時体制と沖縄方言論争

総動員体制期における言論

戦時体制下、戦場での全発

戦後を生きる全発

Hosei University Repository

沖縄民政府時代
戦後の活動
沖縄近現代史とは何か――エピローグ

本書の構成は、知識人としての全発の個人史的な経緯を、いわば歴史のタテ糸として時系列的に追いつつ、全発が出会った同時代人、また全発が直面していた近現代沖縄をめぐる思想史的史実や事件などの展開過程をヨコ糸として配置されている。対象とされる時期は、全発の生きた、一八八〇年代後半から沖縄戦後の一九五〇年代にいたる六〇年以上におよぶ。

著者のことばをかりれば、本書は「島袋全発の生涯の軌跡を考察することで、（中略―引用者）波乱に満ちた沖縄近現代史の一端を明らかにしようとする試みである」（二頁）。したがって、本書は、全発の個人史研究であると同時に、全発の軌跡をたどることで近現代沖縄史の特徴をおのずと浮き彫りにする。評者の理解では、前者はいわば「目的としての全発研究」であり、後者は「方法としての全発研究」といえる。本書にはこうしたふたつの意図が込められている。

Hosei University Repository

三　内容

書評の手続きにしたがって、本書の内容を章ごとに要目としてとらえておきたい（ただし、該当の頁数を記載しない場合がある）。

「沖縄学の群像――プロローグ」は、本書が向き合う問題の構図が示される。著者の整理によれば、太田朝敷、謝花昇は「近代沖縄初期の言論人」とされ、伊波普猷、真境名安興、東恩納寛惇は「沖縄学第一世代」と目される。これにつづく「沖縄学第二世代」は、「本土在住」「沖縄在住」「台湾在住」として主要な居住地によって三区分される。このうち全発は「沖縄学第二世代」のうち「沖縄在住」の区分に位置づけられる。こうした整理に拠りつつ著者は、以下のように問題の所在を示す。「第一世代と第二世代の本土在住の多くの郷土研究者たちにおいては、すでに著作目録、年譜作成を含めた全集や著作集が刊行されているが、第二世代の沖縄在住や台湾在住の郷土研究者たちの基礎資料はいまだ未整備のままであり、まずはその整備が急がれよう」。のちに本書の評価にかかわる論点としても示すが、著者はここから全発にかかわる史資料の博捜に着手した。その結果、全発による論稿として「現在で確認できた文章は（短歌は除いて）、少なくとも百三十点以上」とされる。

「知識人・全発の誕生――文明開化から植民地時代へ」では、全発の幼少期から那覇尋常高等小学校、沖縄県立中学校、鹿児島の第七高等学校在学をへて京都大学を卒業し、一九一〇年代なかばに帰

Hosei University Repository

郷するまでの時期をあつかう。

少年期の全発が那覇でみずからも経験することになった「断髪」が沖縄社会にもたらした衝撃について、東アジアのなかでの沖縄の位置が意識されつつ描き出される。沖縄県立中学校に進学後の全発は、与謝野鉄幹・晶子の『明星』から影響を受けて文芸活動をはじめる。本書の方法的な特徴としてのちにも取り上げるが、全発の人生にとって「大きな生きる糧」になったとされる短歌に全発はこの頃に出会う（全発は雅号を「濤韻」、筆名を「西幸夫」としていた）。一九〇五年に同校を卒業したのち、全発はおよそ二年のあいだ、東京に滞在し、早稲田大学に在学する。全発は在京中の伊波普猷とも接点をもっていた。上田敏が編集していた『芸苑』に浪漫主義的な詩歌を投稿していたのはこの頃である。一九〇七年、第七高等学校造士館に入学。鹿児島での生活がはじまる。在学中に全発は結婚し、鹿児島と沖縄での別居生活となる。この時期の全発は学生生活や旅行記について『沖縄毎日新聞』に投稿しているが、なかでも著者が着目するのは、前県属・瀧口文夫による『琉球新報』（一九〇九年五月二六日）掲載の談話をめぐる言論と一連の論争である。同論争中における全発の発言には、沖縄人と他府県人とのあいだに「心意構造を異にする」という表現がある。著者はこの表現に沖縄人としての全発の「志操」を見出す。この時期、青年期の全発は「沖縄社会の現実を見つめ批評し、社会の開明を志す若者の一人」として変化しつつあった。

全発の「志操」の内実をよりふかめて考察するために、著者は時間軸をもどして、「人類館事件」

Hosei University Repository

（一九〇三年）を考察の補助線として設定する。同事件をめぐる論説における太田朝敷、ならびに伊波普猷による応答の共通認識として、著者は「沖縄が帝国日本の『臣民』や『国民』である／になるという威光は、圧倒的な輝きを放っていた」ことを指摘する。よく知られるように、伊波におけるこの認識は、いわゆるソテツ地獄をへて転換をとげる。[1] 著者は先行研究の成果を引照しながら、この伊波の転換について、「『臣民』や『国民』への期待感が剥落していった点」をさらに付加すべきではないかと主張している。なお、著者も指摘するように「人類館事件」に直接かかわる全発の論説は史料的に確認されてはいない。全発は事件当時、「まだ中学生で浪漫主義の短歌同人誌『明星』に心をときめかしていた地方の文学青年」であった。

一九一〇年、全発は京都帝国大学法科大学に入学した。在学中の全発は『沖縄毎日新聞』に投稿をかさね、さかんに言論活動を展開していた。著者によれば同時期の言論は「全発の生涯の中で質量ともに最も豊かで多彩」であった。このことを反映して、本書においてもっともおおくの頁数が割り振られた節となっている。全発による言論の内容を、著者は「三つの系列」に整理してみせる。

第一は沖縄社会の現況にかかわる言論である。全発の「国家主義」のもつ「ある種の限界」を確認しつつも、膨張主義とは異なり、「常に『被植民地の視点』」を全発が保持していた点を著者は指摘する。また、伊波普猷による「一大塹壕」という表現、全発の「心意構造を異にする」という表現から、著者は「沖縄人と他府県人との間に違いがあることを認める点において同じ認識であった」と指

Hosei University Repository

摘する。そのうえで「琉球民族」をどのようにとらえるのかについて、両者には「微妙な差異」が存在していたことに着目をうながす。その要点は、伊波普猷が日琉同祖論にもとづき民族の「客観的要素」を重視する姿勢をとっていたのに対して、全発は「主観的要素」である民族的自覚を重視していた。伊波からの「圧倒的な影響」を受けていたはずの全発が、こうした独自の視点を持ち得た背景について、著者は『京都法学会雑誌』などを素材として考証する。さらに同時代における乃木希典の「殉死」とその余波をめぐる事件や論争への全発のかかわりを拾い上げることで、「琉球人の民族意識を強調する全発の考え方」が形成されていたことを読み解いている。

第二は人物評伝や経済を中心とした郷土史にかかわる歴史論文である。著者は、この時期の全発に影響を与えていた人物として、伊波普猷にくわえて河上肇に着目する。全発は「河上肇舌禍事件」（一九一一年）に直接かかわる言論を展開してはいない。そのうえでも全発の歴史観には「河上肇の強い影響により、経済を基盤においた唯物史観の考え方が中心にあった。しかしそれは、歴史観という学問的な影響にとどまる」と著者は指摘する。

第三に哲学や宗教など、精神世界の内省にかかわる言論である。この時期に全発は、「学問的に、河上の唯物史観の影響を受けつつも、『人生問題』について煩悶していた」。この時期におこなわれた「エヌエム会」との宗教などをめぐる論争を通じ、全発は「個人意識」を確立させ、「自己の発見」にいたったとされる。

Hosei University Repository

「教育と南島研究の時代」は、一九一四年に全発が大学を卒業したのち、翌年四月に帰郷してから、一九三五年に沖縄県立図書館長として就任するまでのおよそ二〇年間が対象時期となる。帰郷後の全発は、新聞社記者などをへて那覇区役所書記に転じた。その後に「選挙法違反事件」により譴責処分をうけた全発は、「政治行政に距離をおき、女子教育ならびに郷土史研究へと沈潜」する。ここから全発の教育者としての時代がはじまる。那覇区立商業学校教諭（ちなみに全発は同校校歌の作詞者である）[2]をへて、那覇市立実科高等女学校長に就任した全発は、学校管理者として女子教育に取り組んだ。

この時期の全発が女子教育とともに力を注いだのは郷土研究であった。おりしも柳田国男の沖縄訪問により、伊波普猷らによって取り組まれてきた郷土研究が「南島研究」として再編されようとしていた頃であった。全発は、真境名安興らとともに「南島研究会」を組織して事務を担うなど、その組織化に積極的にかかわった。同時期には、同会のほか沖縄県教育会によって設置された「沖縄郷土研究会」のように、郷土研究を目的とした団体が設立されていたが、全発らの「南島研究会」は、その「純学術的」性格において特徴的であったと著者は評価する。

著者によれば、この頃の全発は沖縄の地で郷土研究に取り組む「決意」を固めていた。一九三二年に全発は「新おもろ学派」の発足となる、「おもろさうし」の研究会をはじめる。「沖縄学第一世代」をつぐ、あたらしい世代による郷土研究の組織化であった。前掲した『那覇変遷記』『沖縄童謡集』

Hosei University Repository

といった全発の主著が刊行されたのもこの時期である。

「戦時体制と沖縄方言論争」では、一九三五年に沖縄県立図書館長に全発が就任してから沖縄戦にいたる時期を対象とする。

同図書館長としての全発は文献資料の収集だけではなく、講習会や展覧会の開催を通じた、利用者本位の図書館運営を展開した。この時期の全発にとってもっともおおきな思想的事件となったのは「沖縄方言論争」であった。従来知られてきた同論争における全発の言論は、断片的であり、また間接的なものにとどまっていた。近年の史料発掘の成果により、あたらしく見出された新聞史料の精査にもとづき、著者は全発と同論争との関係をあらたに読み解いている。著者によれば全発の考えは、「標準語を奨励すべきだが、方言を撲滅してはならない」というものであった。この考えは、沖縄県当局の政策を結果として批判することになり、全発は一九四〇年に同図書館長を退職した。

こうした全発の考えは、一方の当事者であった柳宗悦ら日本民芸協会同人とも異なっていたことに著者は注意をうながす。そのちがいは、「沖縄文化を決して『卑下』するのでもない、かつ過剰な思い入れによって『過剰評価』するのでもない」、全発の姿勢と視点であった。退職の翌日、全発は私立開南中学校教諭に着任した。

他方、戦時体制が全発の言動にも決して無関係ではなかったことに著者は同時に着目する。それは、「図南塾」などの大政翼賛会関係の一連の文化運動への参加であり、また、一時は距離をおいた

Hosei University Repository

はずの政治の世界にもどり、「翼賛選挙」というべき那覇市会議員選挙に立候補し、当選したことである。ここに著者は全発における「思想の変容」を見て取る。しかし、著者はむしろここから分析をはじめるべきと強調する。川平朝令との対比などから著者は、戦時体制下の全発における「抑制」、あるいは「ぎりぎりのところで自己を失わない姿勢」を見出している。沖縄戦時下において全発は、少年護郷隊員からスパイの嫌疑をかけられるという「衝撃的な体験」をもった。

「戦後を生きる全発」では、銀原収容所キャンプで沖縄戦の終結をむかえた全発が、一九四六年に発足した沖縄民政府官房長に就任し、米軍占領下の沖縄で役人として復興に取り組んでいた時期をあつかう。著者によれば、「全発の戦後の活動には、戦争の惨禍を経験したことによる『平和』への強い願いと、『郷土文化』に対する深い愛着が底流にあって一貫」していたという。

「沖縄近現代史とは何か――エピローグ」では、本書全体のまとめが示される。「抑圧」と「解放」という「二重意識」、また「パトリオティズム」といった概念を本書の内容に即して検討しつつ、著者は「島袋全発にとって、沖縄近現代の歴史とはいったい何だったのだろうか」とあらたに問いかける。

四　意義と論点

Hosei University Repository

さきに評者は本書にはふたつの意図があるとした。「目的としての全発研究」と「方法としての全発研究」である。この区分にしたがいつつ、本書の意義と論点を以下で整理する。

まず、「目的としての全発研究」にかかわる意義と論点は、相互に関連した以下のふたつの点として示すことができる。

ひとつは、全発にかかわる史料的な視野をひろげたことである。著者はこれまでにみてきた新聞や雑誌などの博捜を通じて、全発に関連した論稿をあらたに見出している。著者は「島袋全発の経歴について、いくつかの訂正や多くの新たな事実の補筆」（一二頁）を本書が提示するとして、ごくひかえめに記しているが、なかでも『沖縄毎日新聞』『京都法学会雑誌』などの調査にもとづき、全発にかかわるあらたな事実史の解明をすすめた。[3]

ただし、この点に関しては、いまだ課題がのこされている。たとえば、象徴的な例として、楢原友満編『沖縄県人事録』（沖縄県人事録編纂所、一九一六年、五〇五頁）の記述に依拠していることが指摘できる。同書を参照しつつ著者は、これまで異説のあった京都からの全発の帰郷時期を特定できたとする（一〇六～一〇七頁）。しかし、周知のように、同書は沖縄近代史研究において個人の履歴を探索する場合に一般的といってよい史料のひとつである。したがって、（同書の記述内容の正確性の検証をも今後の課題としつつ）、全発の個人史にかかわる史料的検討にはいまだに余地がのこされているのではないか。そのなかには、全発当人の言説や所属していた機関・団体などの関係史料のほ

Hosei University Repository

か、周辺にいた人物の言論などがふくまれる。この場合、本書で著者があらたに分析をくわえた史料の再検証をふまえてという意味においてである。

とはいえ、全発研究における史料的水準をこれまでに代表してきたのは、前掲の『島袋全発著作集』であった。著者が指摘するように、同書は沖縄戦以後に公表された論稿にかぎられている（六頁）。本書が刊行されたことで、史料的水準が格段に上昇したことはたしかであり、研究史における着実な貢献といえる。このことは研究史の筆頭としてさきに挙げた比屋根照夫の論稿における史料的な視野とくらべてみれば明白である。

もうひとつは、史料的な視野をひろげたなかでも、全発が表現手段として多用した短歌に著者がするどく着目したことが特筆できる。さきに本書の内容としてみたように、著者が短歌に着目したのは、全発の個人史に寄り添ううえでいわば必然であった。一般に思想史をたどる場合、一定程度のまとまった論稿が中心的な素材とされる。このかぎりで通説的にいえば、短歌などの文芸作品はあくまで非中心的な素材である。しかし、本書での短歌への着目は、方法論として、決して補足的、予備的な位置を占めるものではない。著者が「あとがき」においても述懐する史資料の不足という近代沖縄史研究の前提条件を克服するうえでは、むしろ正当な方法的実践といえる。

しかし、その方法的実践が本書において説得的であるかはかならずしも明確ではない。たとえば、全発が一九三〇年代後半の戦時体制下、『心の花』に投稿した短歌についての解釈（一四二～一四三

Hosei University Repository

頁）は、あくまで推論の域を出ていない。短歌解釈にかかわるこうした論点については、おそらく著者自身がすでに自覚的であったのではないかと評者は推察する。いずれにしても著者の推論を立証するためには、同時期における文学的な解釈の通説に関する検討にまで踏み込んだ、より慎重な分析が求められる。ただし、このことは、主観的感性によってつくられたはずの短歌を個人史研究の方法とすることのむずかしさの反映であり、ただちに著者による解釈があやまりであることを断定するものではない。

つぎに「方法としての全発研究」にかかわる意義として、とくに以下のことを指摘しておきたい。それは、「沖縄在住」の「沖縄学第二世代」に著者がいみじくも着目したことの意義である。沖縄戦の惨状、それにつづく米軍占領を沖縄の地でみずから体験した全発の個人史を通して、本書は沖縄の近現代史をきわめて鮮明に浮かび上がらせている。評者もまさしくそうであったのだが、全発の軌跡を通じて、読者は近現代沖縄史という激動そのものであった歴史空間にふかく思いを馳せることにいざなわれる。この意味において、「方法としての全発」という本書のもうひとつの意図は見事に達成されている。

Hosei University Repository

おわりに

それにしても著者はなぜ、かくも全発に惹きつけられたのであろうか。その一端は、「近現代沖縄の歴史を生きた彼の激動の軌跡に対する驚き」であったとして「あとがき」に記されている（二〇六頁）。

評者の推察をまじえさせていただければ、著者は全発の生き方になんらかの形でみずからを投影していたのではないか。共感していたといいかえてもよい。ひとりの「知識人」であった全発が時代とどのように向き合ってきたのか、本書において著者はそこからなにかを学び取ろうとしていた。だからこそ、たんに研究史上の空白を埋めるという、いわば研究手続き上の意義には収まらない、ある種の思い入れを本書からつよく感じ取ることができる。このように判断するのはおそらく評者だけではないだろう。この思い入れこそが本書の基底的な魅力となっている。

かつて著者はみずからが「正統的な研究者」ではないとする自己認識を示していた。[4] これは、もちろん韜晦と謙遜でもあるのだが、現行の沖縄研究についての著者の悲観的認識、こういってよければ焦燥と憤りを同時に暗示しているのではないかと評者は考えている。

本書が示すように、沖縄研究は「民間学」としての個性を保持しつづけてきた。そして、この個性には「沖縄社会の現実に応答する問題意識が初発から内包」されていたと著者はいう（二〇五頁）。

Hosei University Repository

「民間学」としての沖縄研究という水脈を正面から受け止めることで著者は、そのゆたかな源泉のひとつであった全発の軌跡を本書において跡づけた。著者は決して賛成しないだろうが、このかぎりでいえば、本書は沖縄研究の正統に位置づくというのが評者の理解である。むろん「正統」か「異端」かといった形式的な論議は無意味である。いわんや所属する機関などは、この場合に論ずるに値しない。たいせつなことは、沖縄の現実と向き合いつづけるという沖縄研究の水脈をその内実において継承できているかどうかである。

屋嘉比収は、政治思想史という学術の世界における制度的領域に安住することはなかった。沖縄を取り巻く現実がそれをゆるさなかったともいえる。こうした著者の学問への姿勢は、沖縄研究の個性そのままであったのではないか。

本書の成果と達成を受けつぎ、これからの沖縄研究が現実に向き合いつづけること。このことが著者の遺志にむくいることになるだろう。本書がこれからもひろく読みつがれることを評者はねがっている。(5)

【註】

(1) 同時期の伊波普猷におけるアイヌ認識の転換については、一九二五年三月に開催されたアイヌ学会での違星瀧次郎との出会いがおおきな契機となっていたことが知られる（伊波普猷「目覚めつつあるアイヌ種族」

Hosei University Repository

『沖縄教育』第一四六号、沖縄県教育会、一九二五年六月、復刻版第一四巻、不二出版、所収）。同稿は全集（『伊波普猷全集』第一一巻、平凡社、一九七六年）に収載されたためこれまでにも活用されてきた。しかし、初出誌である『沖縄教育』第一四六号は、すくなくとも那覇市企画部市史編集室編・発行『沖縄教育目次集（第三一号～第三〇九号）』が刊行された一九七七年前後以降、その所在がながらく不明であった。つまり、初出誌原本を確認できないままの状態がつづいていたのである。じつはこの点を指摘していたのが著者であった（同章の初出論稿である、屋嘉比収「近代沖縄におけるマイノリティー認識の変遷」『別冊『環』6　琉球文化圏とは何か』藤原書店、二〇〇三年、二五三頁、参照）。この指摘は、後発の世代が初出誌にかかわる史料調査をすすめるうえでみちびきの糸となった。なお、同号原本は近年になって沖縄県立博物館・美術館、ならびに沖縄県立芸術大学附属研究所に所蔵されていることがさいわいにも確認された。

（2）作詞は全発であり、作曲は園山民平であった（「那覇商業学校々歌」『沖縄教育』第六九号、一九一三年一月、復刻版第五巻、不二出版、所収）。

（3）このうち新聞史料について著者は、「郷土史家が沖縄研究の成果を地元新聞紙上で発表し、新聞社もその成果を積極的に地元に還元する役割を果たすという相互関係」にあったと指摘している（二〇五頁）。全発研究において新聞史料の探索は、「民間学」としての沖縄研究の発表媒体にかかわる特徴の反映でもあった。

（4）屋嘉比収ほか編『沖縄・問いを立てる1　沖縄に向き合う――まなざしと方法』（社会評論社、二〇〇八

Hosei University Repository

年）三二頁、参照。

（5）本書の価値をさらにたかめるために、あきらかな誤記、ならびに修訂を要すると思われる箇所・表現などを、あくまで管見のかぎりにおいて以下に注記する。とくに刊行先において、本書が増刷されるに際して、ご勘案いただければ幸いである。

頁数	本文中の表記	修訂内容
一四	『那覇市尋常高等小学校開校四十年記念誌』	「市」は不要
二二	約二年弱ほど	（同義反復）
一二〇・一二一・一三八	沖縄教育会	沖縄県教育会
一二二	沖縄郷土協会	沖縄郷土研究会
一七〇	「夏目漫録」	「夏日漫録」